大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

高頻度の動・名/名・動２品詞多義語の多義構造の記述

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮畑, 一範 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002708

高頻度の動･名/名･動２品詞多義語の多義構造の記述

宮　畑　一　範
<kazm@lc.osakafu-u.ac.jp>

0. はじめに

一般に英語は動詞と名詞の間での品詞転換が多いと言われる。実際，１億語超えコーパス BNC において800回以上の使用が観察される品詞（POSのタグづけされたクラス）[1] 別の6318単語（Kilgarriff（1995））に限っても，複数の品詞（POSタグ）が観察される772項目[2] のうち，動詞・名詞の２品詞（POSタグ）で収録されている項目が500[3] と大半を占める。

本稿では，宮畑（2015）で提案した多品詞語の多義構造の記述の枠組み[4] に従って，この500項目のうち，動詞･名詞のいずれの品詞（POSタグ）の頻度もトップ1000に含まれる27項目の記述を試みる。取り上げる27項目とそれぞれの頻度順位は以下の通り。look（v 90位；n

---

[1] この「品詞」（POSタグ）には，名詞，動詞，形容詞などの標準的なもの以外に，to に付された infinitive-marker も含む。また，頻度に関しては，あくまでも同一語形の同一品詞（POSタグ）に基づくものなので，例えば，名詞の fan では「扇」（とその拡張義）の fan と「熱狂的な支持者」の fan とが混在して扱われることになり，順位が正当でないケースもありうる。

[2] 項目数を数えるに当たっては，リスト中2588位の car（v）のように明らかに誤記と判断されるものは除外してある（BNCに収録されている car の例で，UNC（分類不能）32，NP0（固有名詞）１以外はすべて NN1（普通名詞・単数）か NN2（普通名詞・複数）のいずれか）。この772項目のうち，収録されている品詞（POSタグ）が最も多いのは５つで，like と round の２項目。４品詞（POSタグ）なのが，back，outside，past，right の４項目。３品詞（POSタグ）収録が，before，close，head など38項目。残り728項目が２品詞（POSタグ）。

[3] 内訳は，頻度順に基づいて，名詞・動詞の順で収録されているものが285項目，動詞・名詞の順で収録されているものが215項目である。

[4] この枠組みは，宮畑（2015）でも触れたように，改善の余地はあるものの，大枠としては，多品詞多義語の多義構造を記述するのに一定の有効性が期待できるものである。本稿は，実際の記述のケーススタディとして，今後の検討を視野に入れた検証という意味合いももつ。

637位），use（v 92位；n 283位），work（v 129位；n 146位），need（v 147位；n 280位），show（v 163位；n 845位），place（n 184位；v 620位），point（n 190位；v 795位），end（n 206位；v 647位），state（n 224位；v 902位），set（v 232位；n 744位），help（v 233位；n 873位），change（n 248位；v 351位），form（n 262位；v 555位），face（n 316位；v 599位），control（n 402位；v 766位），force（n 420位；v 809位），increase（v 430位；n 872位），act（n 455位；v 654位），plan（n 475位；v 658位），support（n 493位；v 534位），record（n 524位；v 978位），claim（v 554位；n 889位），deal（v 619位；n 848位），share（n 638位；v 882位），love（v 666位；n 741位），design（n 707位；v 862位），answer（n 810位；v 989位）。

1．記述法

多品詞多義語の記述には，多品詞の品詞内・品詞間の語義関係をそれぞれ縦軸・横軸に配置するマトリックス方式を採る。縦方向は，メタファー・メトニミー・シネクドキの精神作用の関与に基づく語義認定および語義間の関連性の同定に従って[5]，品詞ごとに配列する。主たる語義（中心義と主意義）間の展開は太実線で結び，そこから展開する語義へのつながりは細実線で表示することで，同一品詞下での多義構造が確認できる。一方，横方向は，中心義をなす品詞（筆頭品詞）から左から右に認知的展開の順に配列し，異なる品詞間で関連する語義を同レベルに並べ(て細点線で結んで表示す)る（対応する語義がない場合は空スペースになる)。これによって，品詞により語義分布がどう異なるかを見ることができる。また，異なる品詞の語義間で認知的作用による展開が認定できる場合は，通常の（同品詞内の主たる語

[5] 基本的に，語義認定およびその配列に関する理論的なバックボーンは，瀬戸(編)（2007）に置く。また，その枠組みでの実践的な辞書記述という成果として，筆者が編集委員として携わった『プログレッシブ英和中辞典〔第５版〕』は依拠するところが大きい。本稿での記述内容は，これらの分析・記述の批判的検討を行った上で，必要な改訂を加えたものである。

義間の）語義展開に合わせて太く（太点線で）表示する。

このマトリックス式の記述に対する最終的な評価は，より多くの実践を踏まえないことには正確に行うことは困難であるが，いくつかの多品詞多義語に関して試作的に記述を行った限りにおいては，多義構造の全体像をかなり正確に記述できる可能性は高いと期待できる。

2. 動詞・名詞または名詞・動詞２品詞多義語27語の多義構造

2.1. look

look の語義展開の柱は動詞義で，対象に「目を向ける」，すなわち，対象を意識して「見る」を要にかなり多様に広がりを見せる。展開の核になる語義は，「目を向ける」（目で見る）に対して結果的な「(…のように)見える」と，未来に対する視線の見立てとなる「〈…する〉つもりである」の２つ。前者（動詞義 **2**）は，人･物を目で見た結果，それがどのように「見える」かに意味が横滑りしたものである。さらに，ここから抽象度が上がって，「〈状況が〉(…のように)見える」に展開する。これは，「見る」は「わかる」という枠組みに基づく見立てである。後者（動詞義 **3**）は，将来を見据える人間の意識（とらえ方)に関わる意味合いである。人の意識が未来に向けられるように，抽象的な事柄・事実が何かに「向けられる」（傾く）に展開する。

名詞義は，動詞義の中の３つの語義が，いずれも文法的ステータスが変わるだけ（「…する」に対して「…すること」というコト的な概念）で引き継がれる。動詞義 **1**「目を向ける」に対して「目を向けること」（見ること），動詞義 1a「注意して見る」に対して「注意して見ること」（検討，調査，考察など），動詞義 **2** に対しては，人が（外から）どのように「見える」かという意味合いで「顔つき，表情」，物が（外から）どのように「見える」かという意味合いで「外観」が対応している。これら３つの名詞義間の認知的な関連性は，対応する動詞義の関連性に平行する。

使用頻度は，圧倒的に動詞義が高く（v 90位；n 637位），この偏りには，語義展開の要にあることと派生義の豊かさが大きく関わってい

ると考えられる。

look

1 自 〈人（の目）などが〉（対象に）**目を向ける** (at) ---- 名【通例 a ～】（対象を）**見ること**
- 1a 自（物・事を）**注意して見る** (at, into) ---- 名【a ～】（…の）**検討，調査** (at, into)
- 1b 他 自【通例命令文で】（…かを）**確かめる**
- 1c 自〈建物が〉（…に）**向いている** (over, onto)

2 自〈人・物が〉（…のように）**見える** ---- 名 C **顔つき，表情；外観**
- 2a 自 ((略式))〈状況が〉（…のように）**見える**

3 他【通例進行形で】((略式))〈人が〉〈…する〉**つもりである** (to do)
- 3a 自〈事柄・事実が〉（…に）**傾く** (to, toward)

2.2. use

語義の広がりは，名詞義の方が豊かであるが，使用頻度は動詞義の方が大きく上回る（v 92位；n 283位）。動詞義と名詞義の接点は，語義展開の要となる動詞義「使う」と名詞義「使うこと」である。両者は，文法的ステータスが異なるのみで，担っている意味自体は同じプロセス義である。同じ意味を要に，動詞義・名詞義でそれぞれ独自の語義の広がりを見せる。動詞義は，道具・手段の中でもとくに資金・燃料のように資源として役立つ物を「使う」と，抽象度を上げて人・地位などを（道具・手段のように）「利用する」に展開する。名詞義は，道具・手段を「使うこと」を起点に結果的な「使われている状態」，部分的な一要素である「使い方」，原因的な「使う能力」に広がるほか，使った結果現れる効果など（役立つこと）と使った結果定着したもの（習慣，慣習）に派生する。

use

- **1** 他 〈道具・手段を〉〈…のために/…するために〉 **使う** (for/ to do)
  - 1a 他 〈資金・燃料などを〉 **使う**
- **2** 他 〈人・地位などを〉 **利用する**

名 【単数形で】（道具・手段を）**使うこと**
- 名 U （道具・手段が）**使われている状態**
- 名 C （道具・手段の）**使い方**
- 名 U （…を）**使う能力** (of)
- 名 U 【しばしば否定・疑問文で】 **役立つこと**
- 名 U C ((形式)) **習慣，慣習**

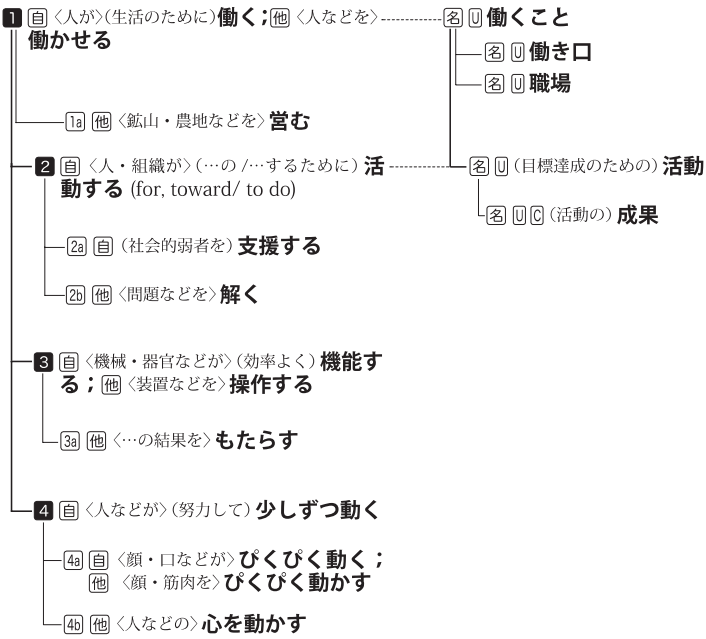
2.3.　work[6]

語義展開の要は動詞義で，動詞義のうち主たるもの２つしか名詞義には引き継がれない。しかしながら，使用頻度では，動詞義・名詞義の差はそれほど大きくなく（v 129位；n 146位），おそらく，動詞義 **1** **2** とそれに対応する名詞義およびそれらから拡張するそれぞれの語義が，work が使用される大半を同様に占めているものと考えられる。動詞義の主要な展開は，メタファーによる見立てである。名詞義の方は，いずれもメトニミーに基づく語義展開。「働くこと」というプロセスに対して，「働き口」は一要素として含まれるもの，「職場」はそのプロセスを行う場所という関係にある。「成果」は「活動」の結果に当たる。

---

[6] 以下に提示する多義構造は，宮畑（2015）で示したものを一部修正してある。

work



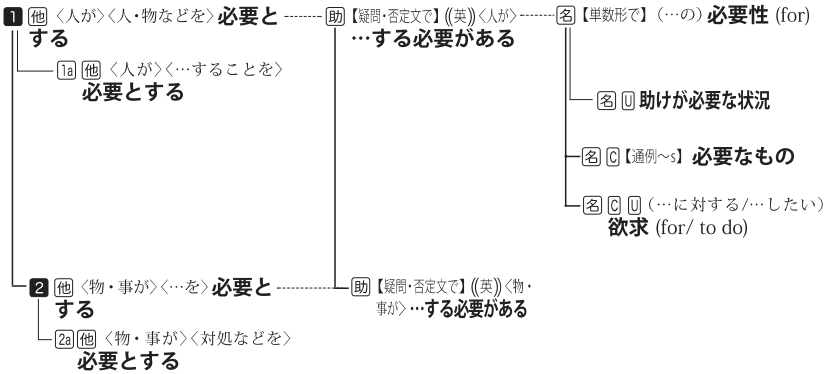
2.4.　need

動詞・名詞がいずれもトップ1000の使用頻度を満たすという今回の記述対象の基準に照らして（v 147位；n 280位）本稿で扱うが，多品詞という意味では，need は助動詞（modal 2497位）も含めて，３品詞の多義語である。以下に示す多義構造は，動詞・助動詞・名詞の３品詞の語義の関連性を記述している。

展開の要は，文法的なステータスの違いはあれ，いずれも，人が何かを「必要とする(こと)」である。動詞と助動詞は，基本的には同じ意味の広がりである。人が何かを「必要とする」から，見立てにより（人が何かを必要とするように）物・事が何かを「必要とする」に拡張する。名詞義は，人に関わる意味を中心に展開する。「必要とすること」（必要性）に対して，「助けが必要な状況」は，とくに衣食住に関わる

ものがなくてそれを「必要とすること」という特定種の意味に当たる。「必要なもの」は，「必要とする」対象となるもの。「欲求」は，「必要とする」気持ちを生み出す源（原因）という関係にある。

need



2.5.　show

語義展開の要は動詞義で，展開も豊かに広がりを見せるのに対して，名詞義は特定の動詞義２つにそれぞれ基づいてローカルに拡張するのみである。使用頻度の大きな差（v 163位；n 845位）は，これを反映するものだと考えられる。

動詞義の展開は多様にわたるが，基本的には，具体的な物を（隠れて見えない所から）取り出して「見せる」行為に見立てることによって成り立つ。他動詞義から自動詞義への拡張は，原因に対する結果という関連性に基づく。ローカルな展開の名詞義のひとつ「展示［上映］会」は，「展示［上映］すること」に対してそれを行う場所という関係にある。もうひとつの「表に出すこと」（外観，様子）に関しては，それぞれ，とくに人が偽りの様子などを「表に出すこと」（見せかけ，うわべ），とくに自然が自らの様子を「表に出すこと」（自然の眺め）という特定種に意味が限定される。

show

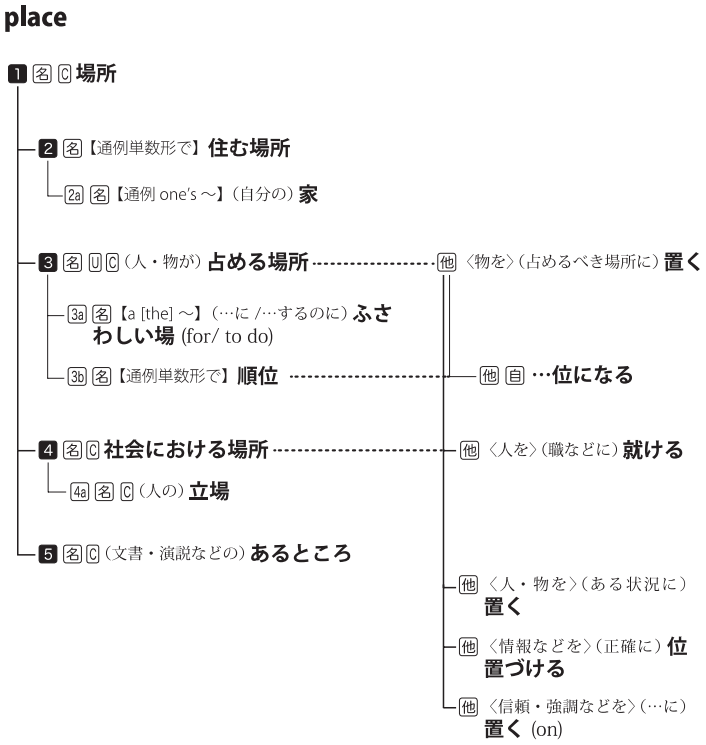
- 1 他 〈物を〉(取り出して) **見せる**
  - 1a 他 〈作品・映画などを〉**展示［上映］する**
    - 名 U (作品などの) **展示，上映**
    - 名 C **展示［上映］会**
  - 1b 自 〈隠れた物が〉**見える**
- 2 他 〈場所などを〉**案内して見せる**
- 3 他 〈やり方などを〉**やって見せる**
- 4 他 〈…を〉**明らかにする**
- 5 他 〈感情・内面などを〉**表に出す**
  - 名 【a ～】(感情・内面などを) **表に出すこと**
  - 名 【a ～】(偽りの様子などを) **表に出すこと**
  - 名 【a ～】(自然の) **眺め** (of)
  - 5a 自 〈感情などが〉**顔に出る**

2.6.　place

place は，物理的な空間における一般的な「場所」の意味を要に多義が広がる。「住む場所」「占める場所」は，いずれも「場所」の特定種という関係。「社会における場所」は，「社会」を物理的な空間として見立てた上で，その中での「位置」という意味である。文書を書いたり読んだり，あるいは，演説などを話したりする中での「あるところ」は，これらの活動の時間的な継続を空間移動で見立てる枠組みの中での「場所」ととらえられる。

動詞義は，物をあるべき場所に「置く」(「占める場所」に対して，そこで行うプロセスという関係）を接点に，見立てにより，いくつかの抽象義に派生する。「…位になる」はある「順位」に，「(職などに）就ける」はある「社会における場所」にそれぞれ人を「置く」ことである（いずれも，場所とそこで行うプロセスの関係(の見立て)）。「(ある状況に)置く」「〈情報などを〉位置づける」「〈信頼・強調などを〉置く」の３つは対応する名詞義はなく，物理的な空間としての場所に「置く」の見立てとして，動詞義内で独自に拡張する語義である。

名詞・動詞ともに語義の広がりは豊かであるが，使用頻度は，語義展開の柱をなす名詞義が大いに優勢である（n 184位；v 620位）。

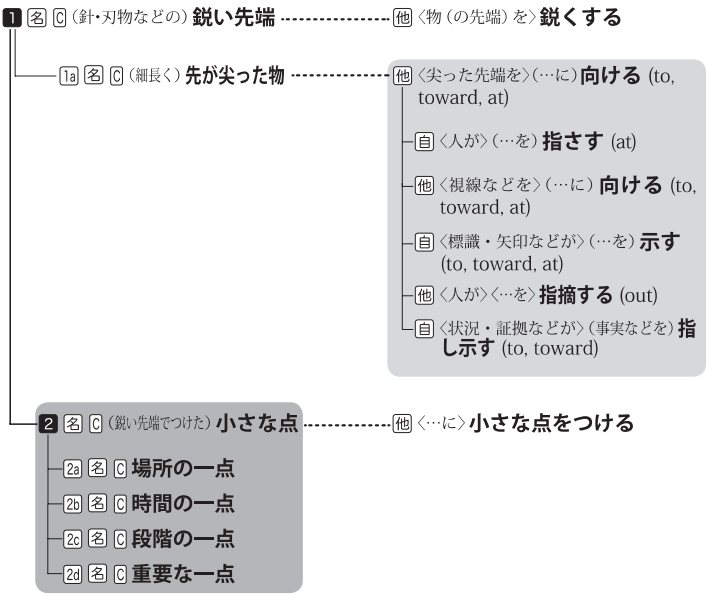


2.7.　point

point の多義構造の骨格は，名詞義の「鋭い先端」とそれが一般化した「先が尖った物」，そして「鋭い先端」でつけた「小さな点」と，その３つからそれぞれ時間的な隣接関係に基づき拡張した動詞義からなる。「〈物（の先端）を〉鋭くする」「小さな点をつける」は，それぞれ「鋭い先端」「小さな点」という結果を生み出すプロセスという関係にある。「〈尖った先端を〉向ける」は，「先が尖った物」に対して行うプロセスを表す。これら３つの動詞義間には互いに認知的な関連

性はない。このうち，「向ける」からは，向きを変える方向性と向けることで指し示す機能面を接点に，豊かに語義が広がる。動詞義としての使用頻度はこれらの語義群に大きく偏る。他方名詞義は，語義 **2**「小さな点」とその見立てに当たる４つの派生義（場所・時間・段階・内容のそれぞれの概念領域における「一点」）が使用の大半を占める。２品詞間でも名詞の方が圧倒的に頻度が上回る（n 190位；v 795位）。[7]

point

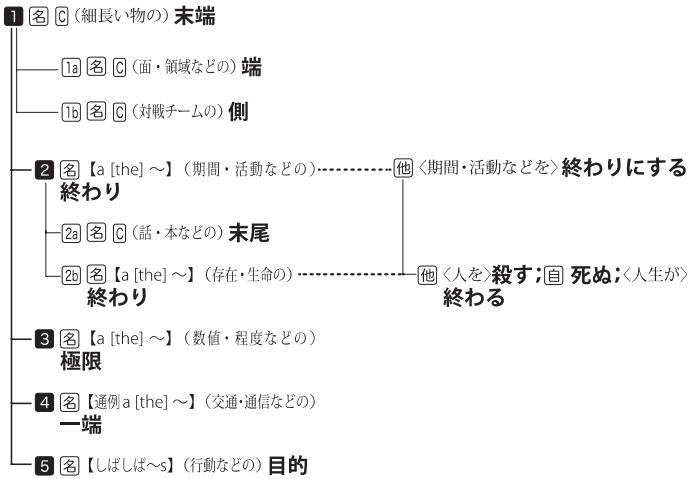


[7] 以下の記述では，多義構造そのもののほか，宮畑（2015）で提示した記述法の向上案のひとつの試行的な実践として，使用頻度の高さと偏りの情報をハイライトの濃淡によって視覚的に示してみた。

2.8.　end

語義展開の要は，名詞義の「末端」で，見立てによってさまざまな抽象的な「末端」の意味に広がる。動詞義は，名詞義 **2**「(期間・活動などの)終わり」，2b「(存在・生命の)終わり」を接点に，それぞれその状態を生じさせるプロセスを意味する「〈期間・活動などを〉終わりにする」「〈人を〉殺す」に転じる。両者は，名詞義 **2** に対する 2b と同様，意味が特殊化した関係である。展開が限定されている割には動詞義の使用頻度は比較的高いが，展開が豊かな名詞義には大きく及ばない（n 206位；v 647位）。

end



2.9.　state

語義展開は，大きく名詞義に偏る。要となる語義は，人・物・事が形を取って成り立っている「外的な状態」。ここから，社会において身を立てている「外的な状態」として「地位」，政治的な文脈で国家が統治され成立している「外的な状態」として「国家」の意味を担う。動詞義は，考えなどを「外的な状態にする」というプロセスに転じて

「公にする」を意味する。語義および展開の偏りがそのまま使用頻度にも表れ，名詞義の方が圧倒的に高い（n 224位；v 902位）。下に示した多義構造では形容詞義を認定して記述しているが，これは名詞義 **3** とその派生義にそれぞれ付随するもので，文法的には各名詞義の形容詞的な用法と考えることもできる。BNCではいずれも名詞扱いである。[8]

state

- **1** 名【the [a] ～】（人・物・事の）**外的な状態** ---------- 他〈考えなどを〉**公にする**
  - 1a 名【通例 a ～】**精神的な状態**
- **2** 名 U ((形式))（社会上の）**地位**
- **3** 名 C（統治状態にある）**国家** ---------- 形 **国家の**
  - 3a 名 C（米・豪の）**州（政府）** ---------- 形 ((米)) **州の**
  - 3b 名【the ～】((特に英)) **（中央）政府；** U（国の）**公式行事** ---------- 形 **公式（用）の**

2.10. set

多義の中心は，動詞義「しっかり置く」で，その見立てとして多様な抽象義に展開する。名詞義は，その中の特定の語義に対応するコト的な概念（「(太陽などが)沈むこと」「(セメントなどが)固まること」「(髪を)整えること」）と，結果物や結果状態（「きちんと整える」ことを行った結果できあがる「ひと揃い」，風・流れなどをある方向に「向ける」ことを行った結果が「向き」）にローカルに対応するのみである。動詞・名詞の頻度差（v 232位；n 744位）は，この語義展開の多寡と対応するものと考えられる。BNCでは，形容詞と認定されている収録用例は本稿執筆時において556しかなく，一覧リストには含

---

[8] 認知的な観点から記述を行う*ODE* 3では，名詞義の中で as modifier の扱い。この米語版である*NOAD* 3は adj を別立てしている。いわゆる学習英英辞典では，*OALD* 9，*CALD* 4，*COBUILD* 8は adj を認定し，*LDOCE* 6は noun と verb のみ。

まれていないが，多品詞語の多義構造の記述として組み込めば，いずれも接点となるプロセス義に対する結果状態という認知的関係として示すことができる。

set

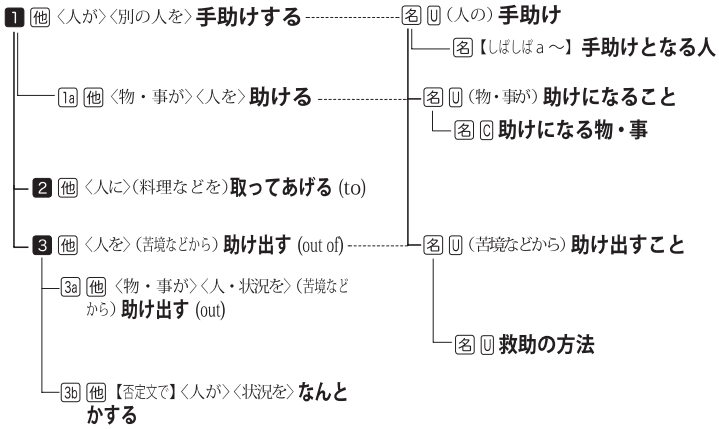
- **1** 他〈物を〉（場所などに）**しっかり置く** ― 形〈物の配置が〉**定まった**
  - 1a 他〈…を〉（…に）**ぴったりつける**
  - 1b 他〈人などを〉**座らせる**
  - 1c 自〈太陽などが〉**沈む** ― 名 U（太陽などが）**沈むこと**
- **2** 他〈柔らかい物を〉**固くする；** 自 **固くなる** ― 名【a ～】（セメントなどが）**固まること**
  - 2a 他〈骨折などした骨を〉**整復する**
  - 2b 他〈表情などを〉**こわばらせる** ― 形〈表情などが〉**こわばった**
  - 2c 他〈心などを〉**固める** ― 形〈心などが〉**固まった**
- **3** 他〈物・事を〉**きちんと整える** ― 名 C（同種の物の）**ひと揃い**
  - 形（前もって）**定められた**
  - 名 C（映画などの）**セット**
  - 名 C（利益・習慣などを同じくする）**仲間**
  - 3a 他〈髪を〉**きちんと整える** ― 名【a ～】（髪を）**整えること**
  - 3b 他〈人を〉**配置する**
  - 3c 他〈組織などを〉**設立する**
  - 3d 自（活動などを）**始める** (to)
- **4** 他〈目標・日時などを〉**きちんと決める** ― 形（略式）（…の /…する）**準備ができた** (for/ to do)
- **5** 他〈舞台・場面などを〉（…に）**設定する** (in)
- **6** 他〈…を〉（ある状態に）**定める**
  - 6a 他〈進路・気持ちなどを〉（…に）**向け る** (to) ― 名【the [a] ～】（風・流れなどの）**向き**

2.11.　help

多義構造の主軸は動詞義で，人が人に施す「手助けする」が要となる。「〈物・事が〉〈人を〉助ける」は，人助けに見立てた意味合い。

「(料理などを)取ってあげる」は，人助けの特定種に当たる。「(苦境などから)助け出す」は，助けることで相手を楽にする作用の類似性に基づく見立てである。さらにここから，救助つながりで２つの派生義に広がる。名詞義は，このうち，「手助けする」「〈物・事が〉助ける」「助け出す」に対応するコト的な概念としての意味を担う。それぞれから，さらに，原因となるもの，あるいは，手段となるものに意味を転じる。使用頻度は，名詞が動詞を圧倒する（v 233位；n 873位）。

help



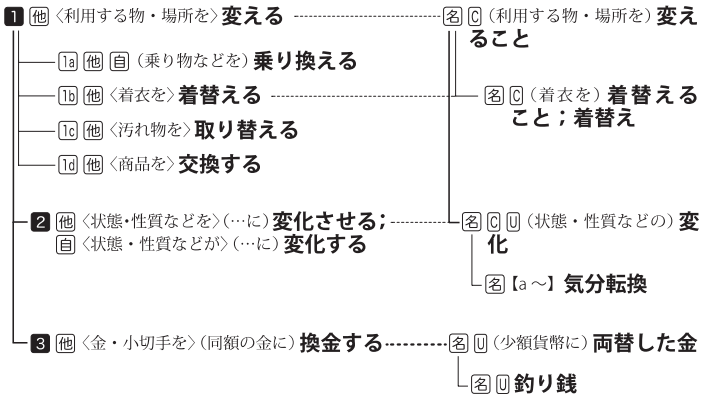
2.12. change[9]

使用頻度は動詞に比べて名詞の方が少し高い（n 248位；v 351位）が，語義展開の要となるのは，動詞義の「変える」である。基本的には，これまでの路線から新しい路線に変える意味合いが通底する。名詞義の大半は，「変える」に対して「変えること」，「着替える」「着替えること」，「変化させる/する」「変化(させる/すること)」と，品詞間では文法的なステータスが変わるのみで，認知的な展開は見られない。

[9] 以下の多義構造の記述は，宮畑（2015）の再録である。

それぞれの品詞内で見れば，いずれも，「変える(こと)」を起点として，それぞれ「着替える(こと)」と「変化させる/する(こと)」へと動詞義と同じパタン（前者は特定種，後者は見立ての関係）で認知的に拡張している。名詞義「両替した金」は，動詞義「換金する」というプロセスに対する結果という関係で認知的に結びつく。

change

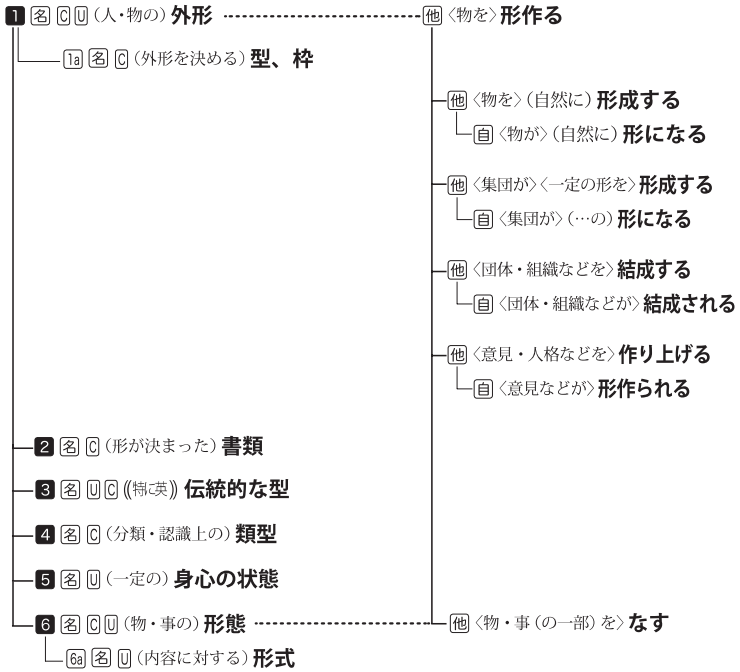


2.13.　form

全体的には，名詞義と動詞義を橋渡しする２つの語義以外は，それぞれが別の概念領域で見立てによる多様な語義拡張を見せる。要となる語義は，名詞義「外形」。具体的な人・物の姿形である。動詞義「形作る」は，この「外形」を生み出すプロセスに当たる。名詞義は，「外形」からさまざまな抽象的な「形」の意味に広がる。動詞義も，「形作る」を接点に，見立てによっていろいろな「形をなす」に展開する。「形作る」から「〈物・事を〉なす」に派生した語義は，名詞義 **6**「(物・事の)形態」とは，結果とプロセスの関係で結びつく（名詞義 **1**「外形」と「形作る」の関係と同じ)。名詞義と対応関係にない「形作る」の見立てに当たる４つの他動詞義は，いずれもその結果に当たる自動詞義に転じる。拡張する語義数は，主軸をなす名詞義と第２品

詞の動詞義とでは大差ないが，使用頻度の点では名詞義が大きく上回る（n 262位；v 555位）。

form



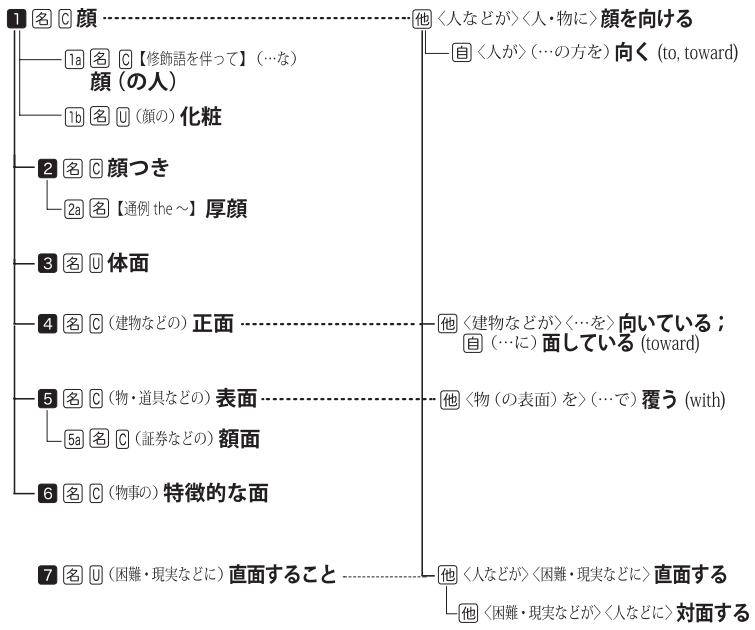
2.14. face

face の多義構造は，語義展開がそれぞれの品詞内では収まらず，少し複雑である[10]。多義の要は名詞義「顔」で，そこからさまざまな「外に向けられた面」に意味が広がる（ **2**～**6** ）。しかし，語義 **7**「直

[10] マトリックス方式の記述法では，以下に示すような同一品詞内を見ているだけでは意味のつながりが断たれ，言わば「離れ小島」と思える語義（名詞義「直面すること」と動詞義「覆う」）も，全体の多義構造の中で位置づけて，その関係を表示することができる。

面すること」は，この展開のラインからは外れ，「顔」を対象としたプロセス義「顔を向ける」から見立てにより拡張した「〈困難・現実などに〉直面する」（困難・現実などの抽象的な対象に「顔を向ける」という見立て）に対するコト的な概念という位置づけとなる。また，他の動詞義でも，「〈建物などが〉向いている」は「（建物などの）正面」をある方向に向けるという意味で「顔を向ける」の見立てになっているが，「〈物（の表面）を〉覆う」は「表面」を対象としたプロセス義であって，「顔を向ける」の見立ての系列ではない。使用頻度は，多義構造の主軸をなす名詞義に大きく偏る（n 316位；v 599位）。語義展開の多寡が関わっていると考えられる。

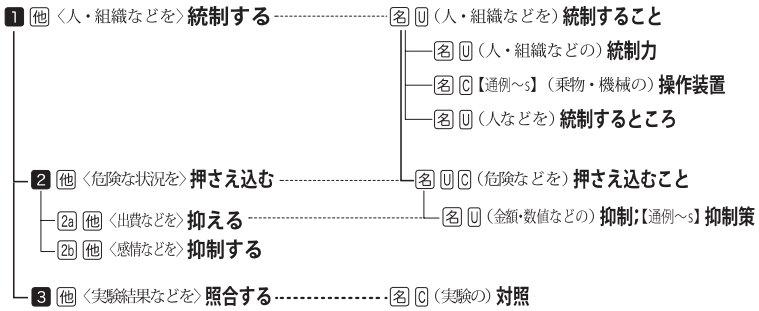
face



2.15. control

2.12 で取り上げた change と同様に，使用頻度は名詞義優勢（n 402位；v 766位）であるが，概念的な主軸は動詞義で，「統制する」にコト的な「統制すること」が付随する。名詞義は，ここから統率・制御系で隣接性に基づいて派生する。「統制力」は「統制すること」を可能にする原因となるもの，「操作装置」は乗物・機械を「統制する」道具，「統制するところ」は「統制」を行う場所という関係。動詞義 **2**「〈危険な状況を〉押さえ込む」は「統制する」の見立て。名詞義「(危険などを)押さえ込むこと」は，これに対応するコト的な概念で，「統制すること」に対しては，動詞義と同様に見立ての関係に当たる。名詞義「(実験の)対照」は，実験結果を比較検証する（照合する）対象という関係であり，プロセス義（のコト的概念）「統制する(こと)」とは（直接的な）認知的つながりはない。

control

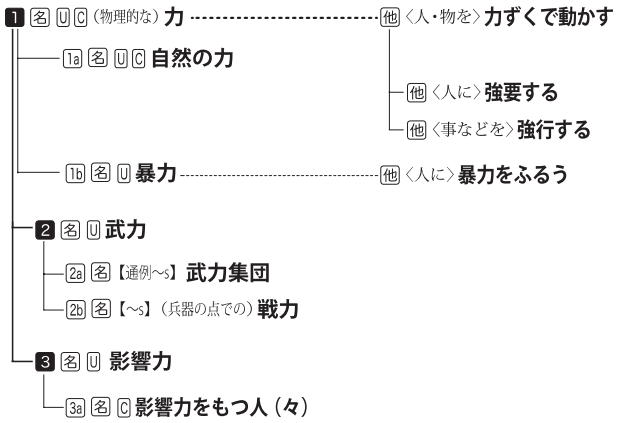


2.16. force

多義の要は名詞義「(物理的な)力」。「暴力」は「(物理的な)力」（とくに腕力という点ではシネクドキが関わる）を用いるプロセスを表す(「暴力をふるう」から見れば，そのコト的な概念「腕力で暴れること」)。「武力」は「(物理的な)力」の中でもとくに武器を用いた力のこと。「武力集団」は「武力」を備えた人々の集まり，「戦力」は「武

力」を備えた兵器の意。「影響力」は抽象的な影響の及ぶ様を「(物理的な)力」で見立てた意味。それを備えた人(々)が「影響力をもつ人(々)」。「(物理的な)力」は，それを用いて「力ずくで動かす」に展開し，さらに見立てによって抽象義に広がりを見せる。使用頻度は，語義展開の豊かさに比例して，名詞義が大きく上回る（n 420位；v 809位)。

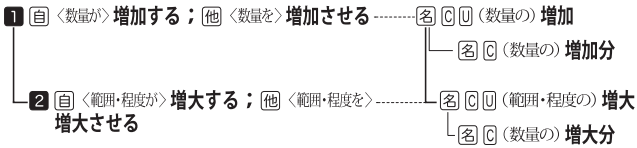
force



2.17.　increase

語義の分布は，具体性の高い数量に関する意味合いと抽象的な範囲・程度の意味合いとできれいに相関性をなすが，使用頻度は動詞義が大きく上回る（v 430位；n 872位)。自動詞義と他動詞義の関係は，結果に対してそれを生み出す働きかけ。「増加」「増大」は，それぞれ「増加する/させること」「増大する/させること」というコト的な意味合い。「増加」「増加分」，「増大」「増大分」は，各プロセスに対してそれに含まれる部分的な要因という関係に当たる。

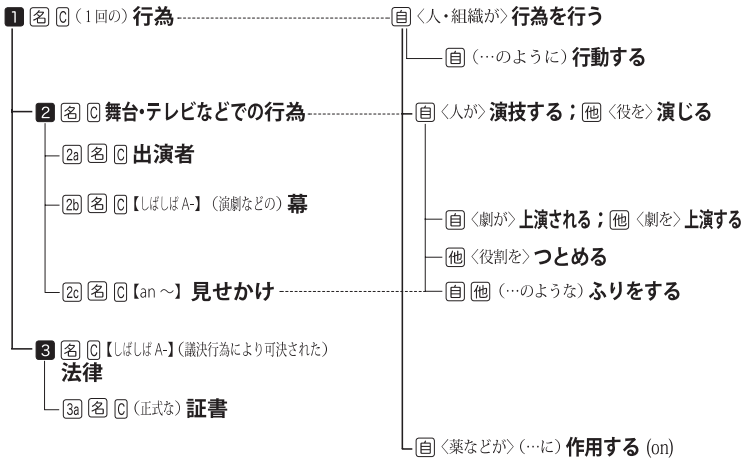
increase



2.18. act

ひとまとまりのある行い「(1回の)行為」がすべての多義の中心に位置づけられる。ここから，「舞台・テレビなどでの行為」(演技・出演など)，「議会での行為」(議決行為)[11] に意味が限定される。「出演者」は「舞台・テレビなどでの行為」を行う主体，「幕」は「舞台での行為」を構成する一区切りという関係。「見せかけ」は舞台などでの「演技」の見立てである。プロセスを表す名詞義 1 2 2c には

act

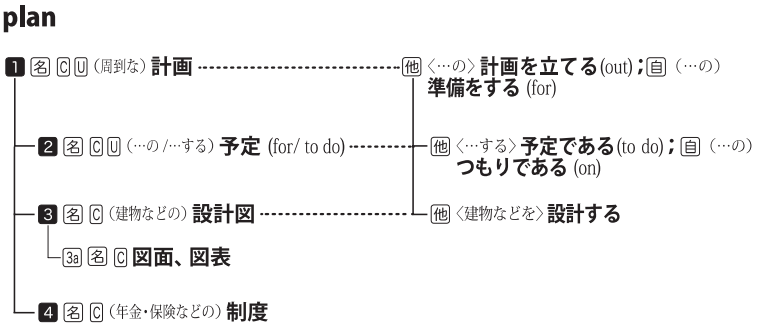


[11] 実際に定着している語義は，さらに指示対象が横滑りし，その行為によって可決された法案（正式に法律となったもの）の意。「議会での行為」は言わば，語義展開の中継点にしかすぎない。そのため，この行為に対応する動詞義は見られない(ということが，マトリックス式の記述からは見通しよく読み取れる)。

それぞれ動詞義が対応する。「作用する」は，人などが「行為を行う」の見立てで，動詞義でのみ見られる派生である。他の動詞義は，いずれも節点となる主たる意義から見立てにより拡張する。使用頻度は，多義の柱をなす名詞義の方が優勢である（n 455位；v 654位）。

2.19.　plan

名詞義を多義構造の柱に，大きくは名詞義と動詞義が対応する形で展開する。要の語義は「計画」で，ここから「予定」「設計図」「（年金・保険などの）制度」に広がりを見せる。いずれも綿密に練って作り上げられたものという特性が通底する。「計画」に対して，動詞義「計画を立てる」はそれを作り上げるプロセスを表す。「予定である」「設計する」は，いずれも同じパタンで展開するが，「制度」に対応する拡張は見られない。使用頻度は，展開の主軸である名詞義に偏りが見られる（n 475位；v 658位）。



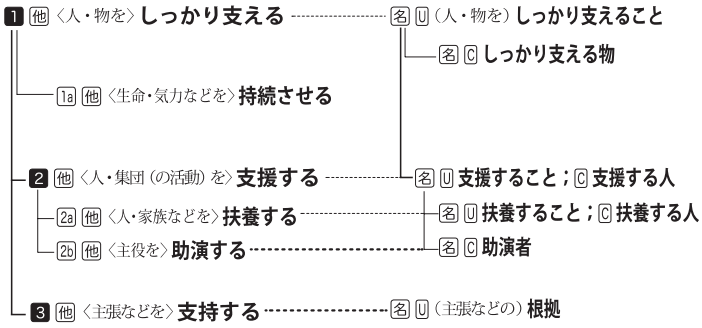
2.20.　support

change（2.12）や control（2.15）と同じく，使用頻度は名詞義がやや優勢であるが（n 493位；v 534位），多義の柱は動詞義にある。基本的には，プロセスを表す動詞義に，それに対応するコト的な名詞義が伴い，そのプロセスを行う（原因となる）ものへと語義展開を見

せるが，拡張が進むにつれてその対応に欠けが生じる[12]。

語義 1 は物理的な意味合いで「しっかり支える」。名詞義はこのコト的な「しっかり支えること」とそれを行う「しっかり支える物」に広がる。物理的な支えの見立てとなる「支援する」にも，名詞義は「支援すること」「支援する人」が対応する。とくに生活における支援である「扶養する」も，名詞義は「扶養すること」「扶養する人」の２つが伴う。主役を支援することである「助演する」では，コト的な意味合いでは使われず，さらに指示対象が横滑りした「助演者」の意味が定着している。多義のつながりとして，名詞義「助演者」は，「支援する人」の見立てに当たるとは言え，動詞義「助演する」とより密に関わっていると考えられる。物理的な支えの見立てである「〈主張などを〉支持する」でも，対応する名詞義はプロセス的な「支持すること」ではなく，その原因に当たる「根拠」である。その意味で，この語義は，名詞義内での認知的なつながりが希薄になり，動詞義と強く結びついていると言える。

support

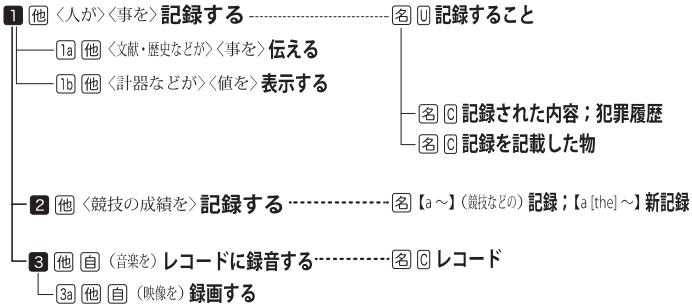


[12] マトリックス式の記述法では，このような語義関係の実態を適切に提示することが可能である。

2.21.　record

record も，使用頻度は名詞義が動詞義を上回る（n 524位；v 978位）が，多義構造としては動詞義が主軸である。要の語義は，動詞義「記録する」。コト的な名詞義「記録すること」を伴う。とくに「〈競技の成績を〉記録する」に意味が限定される。「（競技などの）記録」は，記録された成績の意。「新記録」はその特定種。これまでに記録された成績を超えた成績のこと。「レコードに録音する」も「記録する」の一種。名詞義「レコード」は，音楽を記録した媒体という意味。主たる動詞義にそれぞれ対応する名詞義間に（直接的な）認知的つながりはない。

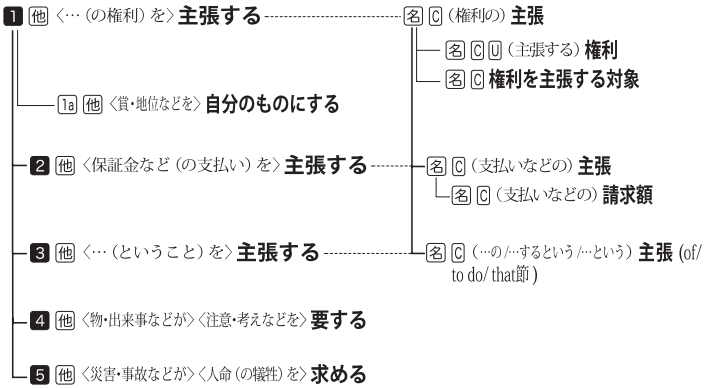
record



2.22.　claim

多義構造の主軸は動詞義。対象によって概念領域が異なるが，基本的に「主張する」というプロセス義に対してコト的な名詞義を伴う。人を主体としない抽象度が極めて高い語義（ **4** **5** ）になると，コト的な名詞義は対応しない。動詞義が名詞義よりも使用頻度が高い（v 554位；n 889位）のは，語義展開の偏りとも関連すると思われる。

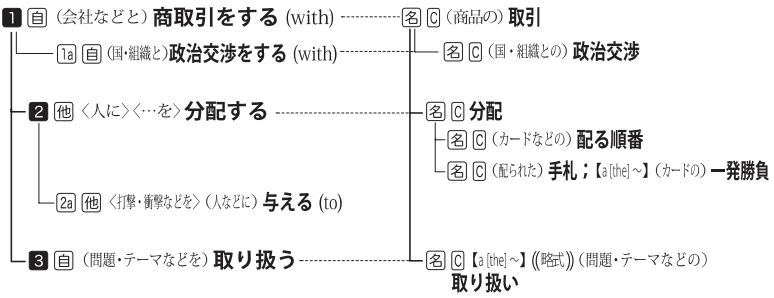
claim



2.23.　deal

語義展開の核になる主たる語義は，いずれもプロセスを表す動詞義にコト的な名詞義を伴う。「商取引をする」に「(商品の)取引」(商取引をすること)，「分配する」に「分配(すること)」，「取り扱う」に「取り扱い」(取り扱うこと)。語義 1a の「政治交渉する」に対する「政治交渉(すること)」も同様の関係。動詞義は，語義 2a「与える」も含め，いずれも語義展開の元となる語義に対して見立てによる拡張である。名詞義「分配(すること)」に対して,「配る順番」は「分配する」というプロセスに含まれる一要素,「手札」は「分配する」ことを行われた結果物というつながり。骨格となる展開はほぼ共通するものの，使用頻度は，展開の柱となる動詞義が上回る（v 619位；n 848位)。

deal



2.24.　share

使用頻度は名詞義が動詞義を上回る（n 638位；v 882位）が，多義構造の主軸は動詞義。名詞義は，動詞義 **1** **2** **3** のプロセスに対するコト的な意味を接点に展開する。それぞれ「共有する(こと)」「共に分け合う(こと)」「等しく負担する(こと)」。「(経験・考えなどを)分かち合う」「〈特徴などを〉共有する」の意味合いでのコト的な名詞義は一般的ではない。展開が両品詞で平行ではなく，動詞義の拡張に偏りがあると言える。名詞義「分け合うこと」「分担すること」からは，それぞれ分かち合った結果物に意味が転じる。「分け前」は，利益などを分け合った結果得られるものである。「株式」も言わば会社の経営権の「分け前」。「(責任などの)負担分」も責任などを担う「分け前」に当たる。

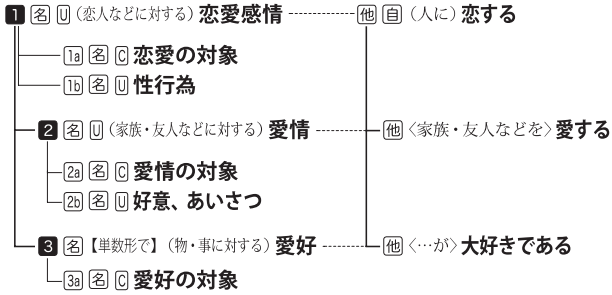
share

- 1 他 自 (場所・物などを) **共有する** ---- 名 C (場所などを) **共有すること**
- 2 他 〈利益などを〉 **共に分け合う** ---- 名 C (利益などを) **分け合うこと**
  - 名 【通例 a [one's] ～】 (利益などの) **分け前**
  - 名 C ((英)) **株式**
- 3 他 〈責任などを〉 **等しく負担する** ---- 名 C (責任などを) **分担すること**
  - 名 【通例 a [one's] ～】 (責任などの) **負担分**
- 4 他 自 (経験・考えなどを) **分かち合う**
- 5 他 〈特徴などを〉 **共有する**

2.25. love

恋人などがとても好きだという気持ちを持ち続けているプロセス的な意味合いが多義の要となる。ここからその気持ちの対象「恋愛の対象」（恋愛の相手）と，その気持ちが原因で行われる行為「性行為」の意味に広がる。「愛情」は「恋愛感情」が一般化した意味。対象が恋人などから人一般に広がっている。「恋愛感情」の場合と同じく，「愛情」の対象に転じる。「好意，あいさつ」は「愛情」の結果示される気持ちやことばという関係。「愛好」は，物・事に対するとても好きという気持ちを恋人などに対するとても好きという気持ちで見立てた意味合い。同様にその対象に意味が転じる。動詞義は，名詞義の主たる語義がもつプロセス的な意味合いを（文法的な振る舞いを変えて）それぞれ引き継ぐだけで，それ以上の展開は見せない。しかしながら，使用頻度の点では，動詞義が名詞義をやや上回る（v 666位；n 741位）。

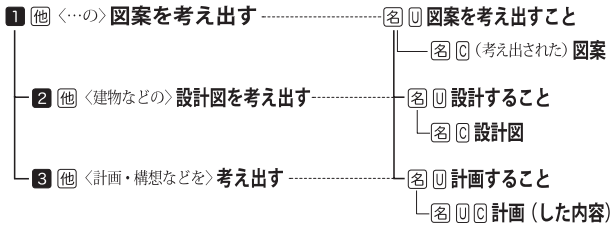
love



2.26.　design

design も，多義構造の柱となる品詞と使用頻度の高い品詞が逆転する。多義の要は動詞義であるが，頻度は名詞義の方がやや上回る（n 707位；v 862位）。語義展開の大枠は，動詞義と名詞義とできれいに対応する。「図案を考え出す（こと）」「設計図を考え出す（こと）」「（計画などを）考え出す（こと）」と，いずれもプロセスの意味合いに対してコト的な名詞義を伴う。それぞれのコト的な名詞義を接点に，いずれもその結果物に当たる考え出された「図案」「設計図」「計画（した内容）」の意味に転じる。プロセス的な意味合いでの品詞間の頻度差がそれほどないのであれば，差分はこれらの派生義の有無に関わると考えられる。

design



2.27. answer

answer は，design とは違って，動詞義の方が名詞義よりも豊かに展開するにもかかわらず，使用頻度は名詞義の方が上回る（n 810位；v 989位）。名詞義は，上から３つはいずれも対応する動詞義のコト的な意味合い。「(言葉で)答える」に「答えること」，「〈問題に〉答える」に「(問題に)答えること」（解答，解決）[13]，「〈攻撃・非難などに〉応じる」に「(攻撃・非難などに)応じること」（対応）。「(目的・要望などを)叶えるもの」は，動詞義に対する原因に意味が転じている（名詞義「答えること」から（直接）認知的に拡張しているわけではない）。残りの動詞義は，動詞義内での拡張にとどまる。「責任を果たす」は，目的などに「応じる」の見立て。「合致する」は，合うようにこたえることで，「(言葉で)答える」の見立てに当たる。

answer

- **1** 他 〈人・手紙・電話などに〉(言葉で) **答える；** 自 **返事をする**
  - 名 U (言葉で) **答えること；** C **返事**
- **2** 他 〈問題に〉**答える；** 自 **解答［解決］する**
  - 名 C **解答，解決（策）**
- **3** 他 〈攻撃・非難などに〉(言葉・行動で) **応じる；** 自 (…に対して) **やり返す** (to)
  - 名 C (攻撃・非難などに対する) **対応** (to)
- **4** 他 〈目的・要望などに〉**応じる；** 自 (…に) **叶う** (for)
  - 名 C (目的・要望などを) **叶えるもの** (to)
  - 4a 他 自 (負担などの) **責任を果たす** (for)
- **5** 他 自 (描写・説明に) **合致する** (to)

[13] 厳密には，コト的な意味合いが対応し，さらに，「答えること」から，そのプロセスの結果に当たる「返事」（答えたことば・内容）に，「解答・解決すること」から，その方法・手段に，認知的な展開が確認できる。以下の記述では，その点は簡便に記してある。

3. まとめ

本稿では，Kilgarriff（1995）による BNC の品詞（POSタグ）別の高頻度ランクの単語のうち，動詞・名詞のいずれにおいてもトップ1000に含まれる27項目に関して，宮畑（2015）で提案したマトリックス式の記述法に従って，その多義構造を提示した。この試行的な記述を通して得られる知見は，大きく以下の３点にまとめることができる。

まず，ひとつは，認知的な観点で多義の要となる語義の品詞（筆頭品詞）と使用頻度の高い品詞の間に見られる傾向に関するものである。27項目というごく限られた範囲ではあるが，頻度順の上位11項目（look，use，work，need，show，place，point，end，state，set，help）すべてにおいてこの両者が一致し，またそれ以降の16項目中でも半数にあたる８項目（form，face，force，increase，act，plan，claim，deal）が合致することを考えると，筆頭品詞と使用頻度が高い品詞との間に，必然的な結びつきはないにせよ，（少なくとも）緩やかな相関関係があることが見て取れる。

ふたつ目に，同一品詞における語義数の多さとその品詞の使用頻度の高さとは（語義によって使用頻度は異なるので）決して比例するわけではないが，それでも動・名/名・動両品詞がいずれも高頻度で使用される項目については，緩やかに対応する傾向にあると言える。筆頭品詞と使用頻度の高い品詞とが一致する頻度順上位11項目（上掲）に関して見ると，look，work，end，state，set の５項目は筆頭品詞の語義数が第２品詞の語義数を大きく上回り（２倍またはそれ超える）[14]，show と place の２項目はそれには及ばないがいずれも３つは上回っている[15]。それ以下の16項目になると，語義数の多さと頻度の高さとが一致するのは，face，control，force，plan，share，design

---

[14] 語義数は，look：動８・名３，work：動10・名５，end：名９・動２，state：名６・動１，set：動17・名７。

[15] show：動８・名５，place：名９・動６。残りの４項目に関しては，need と help は両品詞の語義数が同じ（それぞれ，動・名４，動・名６），use と point は使用頻度が低い第２品詞の方が語義数は上回る（それぞれ，動３・名６，名７・動８）。

の６項目にとどまる[16]。

また，多義が生じる原因は認知作用が働くか否かによるのであって（文法的なステータスである）品詞によるものではないが，use や love の多義展開に端的に見られるように，動詞義と（プロセス的な）名詞義との展開の可能性に関する差をうかがうことができる。プロセス的な名詞義の場合，動詞義と同様の展開が可能な上，さらにそこから他のモノ的な意味に横滑りすることが可能である[17]。これに対して動詞義は，動作・行為の意味に限定されるので，時間的に先行・後続するまたは含まれる動作・行為に横滑りするか，見立てによって概念領域を変えるかの域にとどまる[18]。

最後に，多義構造を記述するマトリックス式に関する評価としては，本稿で提示した27項目（うち work と change の２項目は宮畑（2015）で先に取り上げているので，新規には25項目）に関しても，複数品詞にわたる多義のつながりを正確に示すことができると言える。とりわけ，同一品詞内では認知的なつながりが見られないような（いわゆる「離れ小島」の）語義の記述については，宮畑（2015）でも言及した change や本稿でとくに指摘した face をはじめ，show や set，control，support，record，answer でも，その位置づけを適切に提示できる記述法であることが確認できる。また，act や support で見たように，認知的観点からすると定着している語義にリンクの欠けが見られるケースでも，意味的なつながりを失うことなく，と言うより

---

[16] 語義数は，face：名11・動６，control：動５・名７，force：名８・動４，plan：名５・動３，share：動５・名６，design：動３・名６。品詞間で比較的語義数に差が見られる。これに対して，語義数の少ない品詞の方が使用頻度が高い10項目に関しては，love（名８・動３）を除いて，語義数にそう大きな差は見られない。act，support，claim は同数（それぞれ，名・動７，名・動６，動・名６），change（動７・名６），form（名８・動10），increase（動２・名４），record（動６・名５），deal（動５・名６），answer（動６・名４）ではいずれも１～２違う程度である。love の名詞義の多さに関しては次に言及する。

[17] 理論的には，プロセスを中心に，原因に当たる行為者・道具・素材・場所・対象と，結果に横滑りするパタンが想定される（瀬戸（編）（2007：7））。

[18] もちろんこれらの展開が豊かに見られる場合には，work や set のように，数多くの動詞義に派生する。

もむしろ，他の（品詞の）語義との関連性を示すことでそれを補完し，各語義を全体的な多義構造の中で適切に位置づけることが可能である。さらに，point においては，語義（の一定のまとまり）による頻度の偏りを表示するアイディアを提案し，今後の改良の可能性の一端を示せたことも，ケーススタディを通しての成果であると言える。

これらを踏まえて，今後はさらに記述を試みる項目数を増やし，マトリックス式の多義構造の記述法の実効性を検証すると同時に，改良を見据えた細部の調整に取り組んでいきたい。

参考文献

CALD 4：*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 4th edition. 2013. Cambridge University Press.

COBUID 8：*COBUILD Advanced Learner's Dictionary*. 8th edition. 2014. Harper Collins.

Kilgarriff, A. 1995. "BNC database and word frequency lists."（1996 updated; 1998 HTML ver.）http://www.kilgarriff.co.uk/bnc-readme.html

LDOCE 6：*Longman Dictionary of Contemporary English*. 6th edition. 2014. Pearson Education.

宮畑一範．2015.「英語多品詞語の多義構造の一記述試案」『言語文化学研究（言語情報編）』第10号，pp. 23-41.

NOAD 3：*New Oxford American Dictionary*. 3rd edition. 2010. Oxford University Press.

OALD 9：*Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 9th edition. 2015. Oxford University Press.

ODE 3：*Oxford Dictionary of English*. 3rd edition. 2010. Oxford University Press.

『プログレッシブ英和中辞典〔第５版〕』2012. 小学館.

瀬戸賢一（編）．2007.『英語多義ネットワーク辞典』小学館.

（大阪府立大学准教授）